

博士課程教育リーディングプログラム 平成25年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成25年度		
申請大学名	名古屋大学	申請大学長名	濱口 道成
申請類型	オールラウンド型	プログラム責任者名	山本 一良
整理番号	G02	プログラムコーディネーター名	杉山 直
プログラム名	PhDプロフェッショナル登龍門		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

博士号を持ち、企業（起業を含む）・官公庁・マスコミ・政治・司法・国際機関・NPOなど、社会のあらゆる分野においてリーダーとして実践的に活躍する職業人、すなわちPhDプロフェッショナルを養成する。まず、名古屋大学の持つ高い研究力に支えられた高度な専門性をコアとして獲得する。その上で、さまざまな分野・背景の人々と協働して創造的な成果を生み出すために必要な能力をコアに対するスポークと位置付け、ディベート力・自己表現力、コミュニケーション能力、マネジメント能力、国際性と異文化・異分野理解力、自律的提案・解決能力などのスポークを本プログラムにより獲得することを通じて、コアである優れた学識が社会の中で真に発揮され得るようにする。スポーク能力をも身に付け得る資質は、プログラム参加時の選考によって保証する。また本プログラムでは、日本の新たな成長戦略としてのものづくり再生の鍵となる東南・南・中央アジアの諸国をフロンティア・アジアと位置づけ、そこで活躍しうる人材を日本人・対象国からを中心とした留学生の双方において養成する。

本プログラムで培われるトップリーダーの資質、すなわち国際性・高いコミュニケーション能力・自律的提案能力を兼ね備えた人材を育成するプロセスは、今後、学内各学部・専攻での大学院教育で生かされていく。また、従来の後継者養成に的を絞った博士課程とは異なり、本プログラムでは異分野・異文化への理解力・展開力を持つPhDプロフェッショナルを養成する。その過程で、学生が企業や官公庁、国際機関などと接触する機会が格段に増え、人材として、博士号取得者の活用可能性に相手方の理解が深まれば、結果として博士号取得者がリーダーとして活躍できる場面が拡大する。高度の専門性を持ちつつ、大学・研究機関に収まりきれないPhDプロフェッショナルを生かす国づくりを行うことこそが今後の日本の成長戦略につながることから、博士号取得者に新たなキャリアパスを提示する本プログラムは、重点化後の大学院教育の一つのモデルケースとなる。これまでの実績に基づいて、フロンティア・アジア諸国との連携を進める点でも、多くの大学に参考となる。

2. プログラムの進捗状況

本年度前半期においては、10月からの本格実施を前に第1期生となる正規履修生・準履修生の選抜試験を行い、参画する学生を確定した。また、昨年度の試行海外研修・試行コースワークの実施結果を分析し、本格的なプログラム運営に向けたノウハウを確認し、実施方法等を決定した。

後半期においては、モンゴル国ウランバートル市で開校式及び初年次研修を行い、学生に本プログラムに参画する意義を明確に持たせる作業を行った。その他毎週金・土曜日に開催される英語研修、各界トップリーダーによる講義、海外自主研修等を実施し、5年一貫プログラムにおける最初の年度において、必要とされるレベルアップを図った。

その他、事業目的達成のため以下のとおり実施した。

- (1) 実施に必要な機材等を購入し、体制を整備した。運営を支援する職員を配置するための部屋を整備した。更に参画する学生が自由に打ち合わせや勉学に利用できる部屋も整備した。
- (2) 運営に必要な学識経験を持った特任教員及び非常勤職員等を雇用した。役割分担を明確化し、教員・事務職員が一体となった組織体制を構築した。
- (3) 学生に異分野理解力を涵養するとともに相談相手となるヤングメンターを配置、学生との個別面談を実施するなど、学生支援の充実を図った。参画している指導教員と共にコアとなる研究者も含めた支援の充実に努めた。
- (4) フロンティア・アジア等の主なフィールドとなり得る国々の関係機関及び国内関係諸機関等と長期に渡る協力関係を構築するため、また、留学生募集、海外研修、その他実施に係る打ち合わせのため教職員を派遣し、または協力者を来校させて打合せを行った。
- (5) 前年度の試行研修等の分析を行った上で、初年次海外研修や効率的に学ぶコースワーク等を策定し、10月以降の実施に反映させた。
- (6) 意欲ある大学院生（留学生を含む）を正規履修生・準履修生として選抜し、その他のサテライトメンバーを加えて研修を実施した。
- (7) 不断の改善を目指し、国際的な業績を持つ国際アドバイザーボードを招聘し、プログラム実施に向け大所高所の知見から助言をお願いした。また、シンポジウムを兼ねた運営委員会を実施し、学生自身からの活動報告も行い広く周知に努めた。
- (8) 周知に必要なホームページの整備を行い、加えて長期的視野からより優秀な学生が本プログラムに参画するよう新聞等を利用した広報活動を実施した。